

# 資料渉猟余話

その98

富安風生(謙次・  
一八八五〜一九七  
九)は、大正・昭和  
期に活躍した愛知県  
出身の俳人である。  
東大卒業後、逋信省  
に入り、電気局長、  
逋信次官を歴任。昭  
和十一年、官界を引  
退した。

俳句は高浜虚子に  
師事し、句誌「ホト  
トギス」に参加、投  
句した。後に「若菜」  
を主宰。句集『草の  
花』『走馬灯』等著  
書は多い。昭和四十  
六年、日本芸術院賞  
を受賞し、同院会員

ある。

天竜川の峡谷に関  
わる多くの紀行・随  
筆・詩歌・伝承等を  
集めた『天龍峡』(今  
村良夫編、下伊那短  
歌協会発行、昭和二  
十七年刊)に、この  
時の作品が掲載され

一枚の写真から⑥  
で名高かったのか、  
その半数以上の句に  
鮎が登場する。  
トラックを乗りつ  
けたりし鮎の宿  
腹ばえば手摺りの  
ひまに鮎の川  
鮎の瀬は欄下に右  
折また左折

詠吟九句である。岸  
壁に建つ仙峽閣がよ  
ほど興味を引いたの  
であろう。

十勝を一眸にして  
楼涼し  
楼脚を磐石に樹て  
水涼し  
巖角に置く小亭の  
夏障子  
紙面の都合上とて

## 富安風生の天龍峽来遊

鎌倉 貞男

その風生が来峽し  
たのは、終戦後間も  
ない昭和二十四年夏  
のことである。遠山  
飯島発電所俳句会同  
人の招聘による。当  
時、あの小さな飯島  
へ、翌三十一日に天  
龍峽の仙峽閣へ宿泊  
したらしい。

次に、天龍峽での  
作は十九句ある。こ  
れらの句は、多く  
当日開かれた句会で  
詠まれたのである。

影されたものと推測した、川合玉堂や中村  
される。風生は天龍 不折が上・下船した  
川に浮く船中で、姑 場所である。  
射橋を背にして、宿 次は、その舟で勝  
の主人(原貞造)と 地を廻った折の船中  
一緒に写っている。 吟であろう。風生  
くつろいで坐す浴衣 は、あの躑躅橋を、  
姿が風生である。 炯々潭を、摩崖十勝  
場所は、仙峽閣下 をこう吟じた。  
の仙牀盤横の舟寄せ 吊橋を見おろす合  
場と思われる。以 歓の花がくれ  
前、本欄で紹介し 潭あれば必ずかは  
う合歓の花  
むづかしき名をも  
らひをる巖涼し  
この時から七十年  
が経過し、阿知原の  
湯も仙峽閣も無くな  
ってしまったが、風  
生の句は時代を越え  
て、生き生きとその  
様を現在に伝えてい  
る。  
(故人敬称略)



舟遊時の富安風生(左)